

隨泉寺寺報

平成 24 年 (2012 年) 4 月号 第 500 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季永代経法要

講師 教得寺住職 大仏 尚道師

講題 『遇法のよろこび』

◇ 永代経について

『永代経』とは、そのような名前のお経があるのではなく、『永代読経』の略で、「永代に渡ってお経が読まれる」という意味から、そう呼ばれているだけです。

また『永代経』には、「お寺が永代に存続し、み教えが大切に受け継がれるように」という願いが込められた意味もあります。したがって、尊いお念仏のみ教えを伝えてくださった、ご先祖の遺徳を偲び、私自身が聞法に励んで、今度はその法灯を子孫に伝えて行ってこそ、その名のり『永代経』と言い得るのです。

◇ 永代経法要について

生前中に仏法を聞き得た喜びとともに、「子や孫へ教えを聞くことの大切さが伝えられていくように」との願いをこめて、永代経懇志をあげられた先祖の遺志が、この『永代経法要』の基になっています。

※年賀状で今年の永代経の御講師は『朝枝思善師』とお知らせしていましたが、朝枝先生の体調が良くないとの連絡をいただきましたので、急遽『大仏尚道』先生をお願いいたしました。急なことでしたので、日程の都合がつかず、14日一日だけのご縁となります。15日は住職が勤めさせていただきます。

4月の法座予定

- 4月 2日 新旧本部役員会 花見
- 4月 8日午前8時より 掃除 井原
- 4月14日昼席午後1時より 春季永代経法要
- 4月15日朝席午前10時より 仏教婦人会総会 おとき
- 4月15日昼席午後1時より 春季永代経法要 引き続き役員総会
- 5月 2日午後6時より 本部役員会

☆ 椎の大木 永代経のころ

裏山の竹林を伐採してもらいました。本堂の屋根を葺き替えた時から、竹の葉っぱが



屋根にかかっていたためし、風しが悪いので出来れば切ってくださいと設計者に注文されていたので、思い切って全部伐採してもらいました。そうしたらなんと風しがよく、日当たりがいいことか。しかしそうしたら、前から気にかかっていた大きな木が目立ってきました。おそらく椎の木だろうと思います。

奈良県の平安時代初期の仏教建築を代表する国宝 室生寺の五重塔は椀皮葺のととても美しい建物ですが、この五重塔の横にあった樹齢650年の杉が台風で根こそぎ倒され、屋根の一部に倒れ掛かってきて、美しい五層の屋根が大破しました。



お寺の僧侶や消防の方たちとともに、観光客や近所の人々も、懸命に仏様を助け出すために、協力したとテレビは報じていました。崩れたお堂をみて涙を流しておられた人々もいました。お寺は僧侶が護るのは当たり前ですが、決してそれだけではありません。地域の人々、あるいは多くの方々によって護られ、続いていくのです。

と同時に、地域の人々、多くの人々の共有財産でもあるのです。650年も続いていたというのは、その間に多くの人々が、護り伝えて下さったということです。この杉はおそらくこの建物がいたんだときに、修改築に使うように植えられていたものでしょう。

奈良の新聞に「もしこの五重塔を修復するときは、この倒れた杉の材木を使ってほしい」と社説に書いてありました。この杉もお寺と共に生きてきたのだから、その杉の材木を使う事は、またこの樹も新しい命を生きる事になる。650年もそのお堂のそばで寄り添うように生きて、今度は五重塔そのものの材料として生き続ける。命の連続性というのはこんな事かもしれません。永代経のころも、おなじ事のように想えます。この人生を懸命に生き、そして命終われば、今度は私たちをみまもってくださる仏様と同じ命を生きる。無寿のいのちを生きる。永代経のころです。

この椎の木を切っているのかどうかわかりません。竹は出来れば編んで竹垣にして使いたいと思います。次の命として護ってくださいねと思います。



☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 栗田ミチコ殿 故 栗田 君雄様 特 永代経志として

永代経懇志 金 参拾萬円 植木 嗣夫殿 故 植木 岩夫様 特 永代経志として

永代経懇志 金 五萬円 菅 博子殿 故 菅 寿徳様 特 永代経志として

永代経懇志 金 拾萬円 前座 久生殿 故 前座 光子様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 栗田ミチコ殿 故 栗田 君雄様 香典返しとして

門信徒会へ 金 一封 植木 嗣夫殿 故 植木 岩夫様 香典返しとして

門信徒会へ 金 一封 菅 博子殿 故 菅 寿徳様 香典返しとして

門信徒会へ 金 一封 前座 久生殿 故 前座 光子様 香典返しとして

4月

この「失敗」のおかげでといえるくらい

失敗から学ぼう

東井 義雄

近頃、青少年の非行や、非人間的なあり方、登校拒否、自殺が、急増してきていますが、こういう事実の背後に、父親が輝きを失ってきているということがあるように思われてなりません。お父さんが輝けば、子どもも必ず輝きます。

恵ちゃんは、近所の人たちも、みんな感心するほどのよい子でしたが、大学の入試に失敗してしまいました。みんなから「よい子」「よい子」といわれてきただけにショックが大きく、食べものものどを らず、やはり、自殺まで考えたといひます。

こうなると、どうしても、お父さんの出番です。

「恵、おいで」 お父さんにそういわれて、恵ちゃんは、お父さんの前に正座しました。

しかし、顔を上げることもできません。

そんな恵ちゃんに対するお父さんの第一声は、力強い、「恵、おめでとう！」のことばでした。あまりにも思いがけないことばに、恵ちゃんが、思わず顔を上げたとき、「恵、おめでとう。いくらお金を積んでも、いくら望んでも得られない、尊い勉強をさせていただいたね。お父さんはね、失敗したとき、

これはきっと、仏さまが、お父さんの一番の問題点を、涙ながらに教えてくださっているのだと信じて、失敗を 大切にしてきた。そして、この失敗のおかげで、といえるようになるまで、がんばってきた。恵、いくらお金を積んでも、いくら望んでも得られない、この度の失敗、どうか、一生涯、大切にするんだよ。それといっしょに・・・」と、お父さんは、姿勢を改められました。

お父さんが、いちばん大切なことを話されるときの、いつものくせです。恵ちゃんも、思わず姿勢を正しました。そのとき、お父さんはこういひました。

「それといっしょに、白分か得意の絶頂に立ったとき、どこかに泣いている人があるということの考えられる人間になっておくれ」

このことばが、恵ちゃんには、仏さまじきじきのおことばのように思われたといひます。すばらしいお父さんをもった感激で、失敗のショックなんか、ふっとんでしまったことはいまでもありません。

日頃、お母さんが、心からお父さんを尊敬されているわけが、恵ちゃんには、はっきりわかってきたといひます。

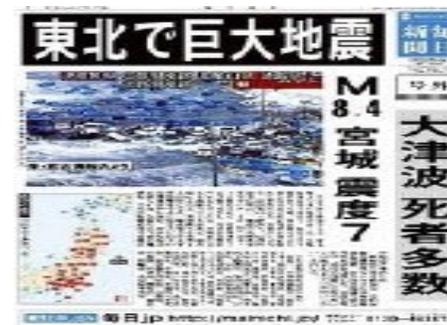


『な、なんと寺報が500号』

随泉寺寺報が今月号で500号を迎えました。1年に12号ですから42年近くかかっています。私が発行させてもらってから15年ぐらいです。それまで前住職が書いていました。私が書き始めたとき、それまでは前住職が記事を書いて、長者原の黒川みつさんが、手書きで清書してくださっていました。それを印刷機で刷って出していました。ワープロで切り貼りをして発行するようになって、《温かみがない》《読みにくい》等々批判がありましたが、黒川さんもお年でもうかけないということでやむなく、ワープロの文字になってしまいました。おそらく、昭和40年ごろ始めて発行されたときは、謄版でガリ版刷りだったのでしょ。

一月毎に発行するというのもなかなか大変です。一ヶ月がすぐにやってきます。毎月2日に発行していますから、3日が月の中で一番ほっとしています。友達が毎月発行するのは大変だろうといひますが、ご法座の案内を兼ねているので、ご法座が毎月あるので、休むことが出来ません。20日ぐらいになると新聞を書かなければ、書かなければと、脅迫されているような焦りがあります。27,8日ぐらいに出来上がればいいのですが、2日の朝によく印刷することもたびたびです。

記事がなかなかなくて、苦勞することもしょっちゅうです。私が書き始めたとき、時々原稿をくださいましたが、このごろあまりありません。子供さんが生まれられたり、グランドゴルフで優勝したり、絵画、書道展で入賞したりという記事をくださいましたが、このごろなくなられた方の思い出を時々投稿してくださるぐらいで、もっぱら私が書いていますので新鮮味が無くなってきました。それでも割合によく読んでいてくださり、特に投稿して下さった記事は『「寺報」に載っていた人は誰か』とか、「あの記事は間違っている」とか、反応があるのでうれしく思ひます。特に私が間違っていたときはすぐ指摘があるので、読んでいてくださるのだと、安心します。



これからもお寺に関することはもちろん、地域のコミュニティ誌として楽しい記事や、大切なことを伝えて生きたいと思ひています。情報や 白いこと地域のニュース等ありましたらぜひとも投稿してください。教えてくだされば記事は私が書きますので、連絡だけください。また最初の頃の寺報がありましたら、お寺に見せてください。